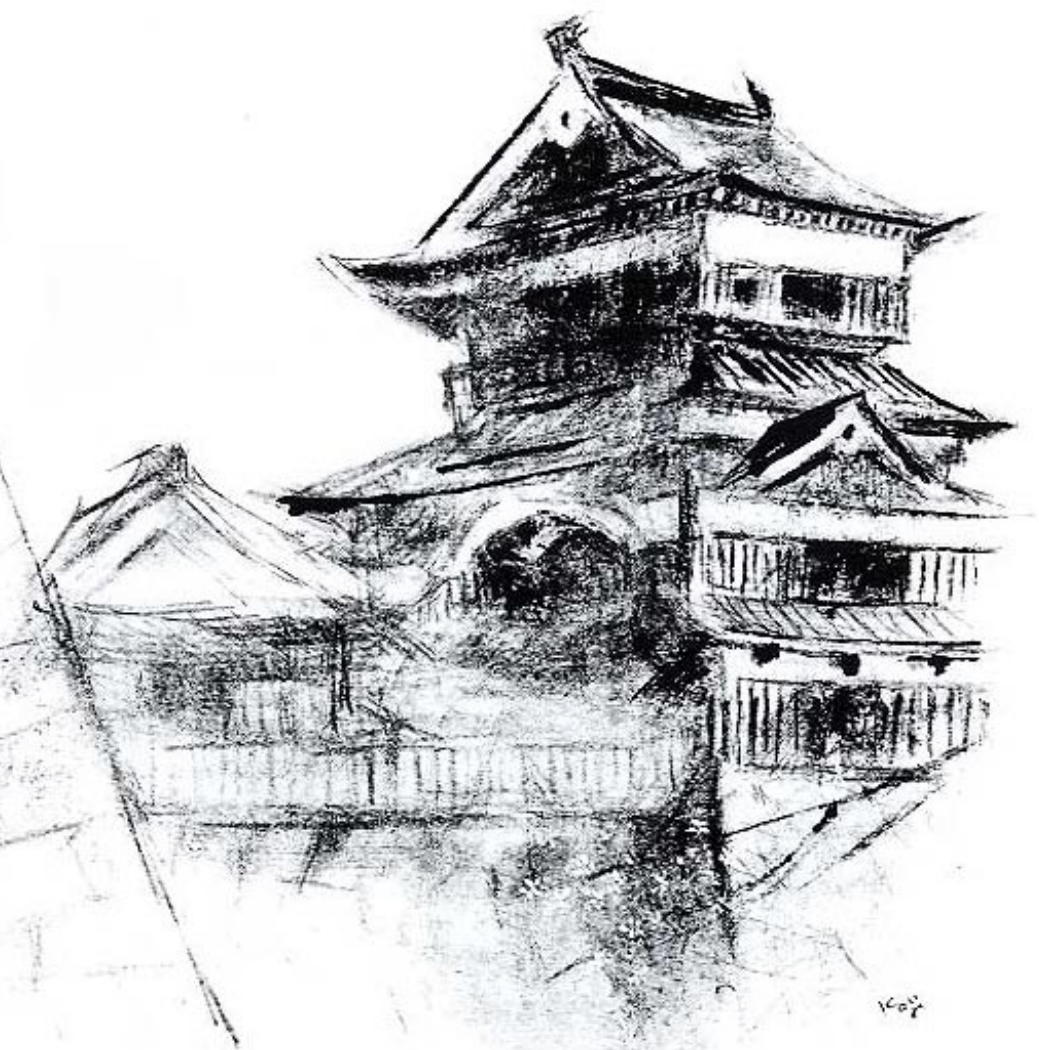


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年10月5日発刊(毎月5日1回発行)
第44巻10月号(通巻543号)

風土

10



新松子

神蔵

器

六日晴れ原爆五十九回忌

身から出て涼風となる一語かな

夜の秋や暈より立つ心柱

種ありてこそその葡萄や日のしづく

川底の砂に日流す晩夏かな

終戦日熱き番茶の喉を過ぐ
新松子老いて大志を持ち歩く
くるぶしの下駄に乗つたる盆踊
すず虫や眠れば覚めぬこと怖る
生きてをり露の小仏大仏
死後も燃ゆ汝が生涯の百日紅
夕べより朝かなかなのはるかかな

悼 鈴木ふくじ

悼 池田絹女



人生のつらさ

平路の小仙

大仙

景



竹間集

同人作品



「櫛」以後(四十八)

野沢しの武

新しき齒刷子下ろす雪の朝
三寒につづく一温待たれをり
戸を叩き去りしは風か雪女郎か
雪女郎なりしか土間の濡れをるは
大寒を待ちぬしごとき訃の一つ
鮫鱈鍋真直ぐ生きて人嫌ひ
追伸にその1、その2、春隣

入道雲

鈴木 石花

スーパーと工場の間田水沸く
早梅雨再検診の知らせあり
肝癌の疑ひ解けし入道雲
吾に似合ふものに作務衣と麦稈帽
明日未だ今あるいのち草を刈る
釣忍殖やして二人暮しかな
谿の音を酒の肴に夏館

青葉木菟

山路 紀子

羽抜鶏電車を止めてしまひけり
月残るあしたの空や半夏生
西日さす片付けられし亡母の部屋
揺れて落つ海の没日や海紅豆
峰雲や鱗鱗の餌台に梯子掛け
サングラス象の形のバスに乗る
レイ・チャールズ死す青葉木菟啼く夜かな

大花火

岩木 茂

街道の脇に売られて浮いて来い
古町の硝子細工の涼しさよ
喜雨来るか縄文蓮の大揺れに
黒蝶の袖たをやかな彼岸寺
かなかなや丹の美しき竹生島
墓洗ふ清水に石の冷ゆるまで
大花火めりめり音を立て崩るる

夏深む

佐藤よしい

四万六千日人の流れのなか流れ
小鳥等に帰る樹のあり夕焼空
昼顔の蔓の行方は問ふまじき
遠き思ひ出ばかり鮮やか夾竹桃
風鈴の鳴らねば忘れられもする
夏深む 枳殻垣に潜り穴
夜の秋を思ひ眩く声の出る

風死す

相沢有理子

夏旺ん蜂蜜入れし粥噴きぬ
水無月の葉灼けひろぐる花壇かな
緑蔭や寺に馴染みの似顔絵師
誰も居ぬ園や全く風死せり
土運ぶベルトコンベヤー灼くる崖
意を通す夫に手古摺る極暑かな
碇泊の貨船ぼつんと夜涼の灯

暑 さ

中谷 葉留

凌霄花夕べの眼鏡洗ひけり
初蟬やドレッツシングの油浮き
丹沢の稜線生るる御祓かな
おはぐるとんぼ風とは別の翹たたむ
三文判さかさまに押す暑さかな
落し文「金沢文庫」へ径岐れ
目の前にある奪衣婆の素足かな

山河集

同人作品



神蔵
器選

方円の水と生きをり涼しかり
立つ秋の通し柱に墨を打つ
人の死にともす灯のあり吊忍
蝸や伊豆の下田に安房の舟
灯台に茄子の花咲く坪畑

近藤幸二郎

水かけて文字浮く絵地図巴里祭
炎天に真つ赤な路面電車行く
組体操の蹴一氣に崩れけり
雲の峰灯台二十九メートル
空中で漕ぎし自転車雲の峰

中嶋陽子

忌の沙汰のとどくやからす瓜の花
合宿にふくらむ村や雲の峰
レリーフを囲む献花や山開

鈴木庸子

養生のための三食百日紅
土用芽や酸素ボンベを取替へて

布施まこと

リフト勾配三十一度雲の峰
大蟻や見上ぐる殺生禁断碑
乗り来たる少年に汗部活の荷
百日紅「一隅照らす」最澄碑
噴水の虹のアーチや美術館

中根美保

プール出て粗くなりゆく雨を浴ぶ
喜雨の手中紙を秤る針の揺れ
スポーツ紙にスポーツ記事なし西日中
人波の誰の目も見ず祭笛
雨止んですぐ飛ぶ虫や夏の果

大河みな北へ流るる白夜かな
山本 浪子

炎昼の露店に並ぶマトリヨーシカ
したたむる絵葉書二枚白夜かな
ブラボーや膝の扇子がすべり落つ
まん丸なアイコンの瞳暑氣中り

円覚寺に夏の講座の相聞歌
平田紀美子

午後二時の鎌倉を行く大暑かな
江の電の一日切符土用入
でで虫や踏切待ち用椅子置かる
炎天や脚立の下の大薬缶

東山へ影を撓はせ鉾の立つ
南奉 栄運

運びきて紐とく金幣夏の朝
炎昼を赫熊に鎮め鉾よこたふ
宵山や霰天神に待ち合はす
蚊遣香持ちて蓑虫庵に佇つ

梅干して母に近づく思ひかな
林 裕子

山門の奥の講座や白木櫛
炎天や一途に座る百度石
けさ秋の葉擦れの風を聴きをりぬ

朝虹や川上に師の住まはるる

海外開発支援団

井口 光石

開墾の井戸掘り当てぬ雲の峰
夕焼けや牛車の運ぶ砂糖黍
航くごとし島の舳先へ土用波
闇に起つ佐渡やり過ごし追ひ烏賊漁
篠の子や水車の落とす杵の音

二千年の一睡を経し大賀蓮
中村 洋子

階段を拭き上げてゐる素足かな
雨上る青き茅の輪をくぐりけり
鬼子母神にあをき石榴の太りつつ
子の髪がくちびるにつく夕端居

火柱の歩く鬼灯市の路地
柴田 久子

七十の唇に彩さすサンガラス
午後よりは風の片寄る田水沸く
村中の田の水沸きてをりしかな
送電線斜めに渡し田水沸く

純白の外は許さず滝落ちる
丁藤ミネ子

風土集



神蔵 器選

めまとひや歩をゆるめても速めても

横浜

中村 洋子

蟻の這ふ古代ローマの本の上

一と言がこころに残り髪洗ふ

東京

柴田 久子

雨粒つくしもつけ草を挿してをり

オクラの実星作りつつ尖りけり

瓜の馬嘶くやうに立たせけり

抱き上げて人形の泣く酷暑かな

雄犬の犬臭くなる夏盛ん

東京

中嶋 陽子

四脚門へ男消えゆく炎暑かな

避暑の家に戸籍調べの巡查かな

ふるさとの真水を汲んで水を打つ

炎天の牛舎の外に黒長靴

東京

中嶋 陽子

木槿咲く单身赴任者用住宅

ポケツトに鳴らす貝殻大夕焼

東京

中嶋 陽子

後継ぎは市役所勤め田水沸く

東京

奥田 弦鬼

ノルマンディーの巨きな牛や雲の峰

ここよりは入れぬ陵墓落し文

津山

生田 作

畦道を跣足通学疎開の日

モーツァルト聴きて育ちしトマトかな

日盛りを風の溢るる一樹あり

板の間の猫につまづく大暑かな

嶺青く因幡美作分かちけり

懇懃に道を問はるる茄子畑

佐倉

松崎 雨休

夏果ての山国の山昏れ残る

男手のかがる釦や田水沸く

焙烙に胡麻のはねとぶ大暑かな

手枕の手の痺れゐる昼寝覚

佐倉

松崎 雨休

水草の花や一茎群を出づ

『城の崎にて』机上に閉づる河鹿笛

佐倉

松崎 雨休

半眼に眠る黒猫パリー祭 横須賀 平田紀美子

パンの耳落してゐたる暑さかな
居残りの野球部員や水を撒く
ふる里に帰る船より雲の峰
炎天下電線埋設工事中
灯台を出てより仰ぐ雲の峰 三鷹 布施まこと

吊革に掴まる汗を拭ひけり
コピー機の熱を吐き出す日の盛り
炎天や大栈橋に不死男句碑
今日の隙梔子の花ひとつ咲き
いくたびも洗顔に立つ土用入 川崎 山本浪子

日焼けして紅一本の化粧かな
校長の画家となり切る夏帽子
靴高く放り跣足の二人かな
巴里祭グラスに指紋残しけり
日本丸の展帆終了雲の峰 川崎 平野恵美子

巴里祭男の立てる厨かな
散り際も姿くづさず花蓮
目の奥に炎昼といふ冥さかな
白好きで一生活通す夏椿
ヒンズーの声湧く大地雲の峰 大和 落合絹代
シワ神の石室借りる驟雨かな

大夕焼雲上にゐること忘れ
下宿屋の往時を今に水を打つ
いにしへへ誘ふ風や大賀蓮
シースルーエレベーターへはたた神 平塚 中沢三省

田水沸く世阿弥の島の能舞台
良寛の海へ下り佇つ跣足の子
炎天より男が覗く小町井戸
薔薇匂ふホスピス棟の籬かな
融通のきかぬ家系や蟻の道 川崎 鈴木庸子

炎天を来て提出の書類不備
山頂の局の消印山開き
百日の赤子抱き上ぐ雲の峰
白南風や自動車に焼くメロンパン
夕風の湖より起る端居かな 東京 林裕子

白芙蓉出さぬ手紙をしたたむる
慈眼へは涼しき礼を返したく
径ふたつ出会ふ深山や滝餅
ハリモミの林に入りぬ夏帽子
注連切つて長刀の稚児夏盛ん 京都 橋添やよひ

鉾稚児に早や風格のおのづから
鉾雛子逸れて烏丸丸太町
口出さぬことにも馴れて夕端居